

視点

ロングステイ 新しい旅のスタイル

立教大学観光学部 教授 安島 博幸



慌ただしい1、2泊の短期旅行に対して、のんびりと同じ場所に滞在する、ロングステイは、最近よく話題になる。京都などにおける都市型、温泉地における湯治場型、田舎暮らしを楽しむ田園型などのタイプがある。しかし、短期の旅行のように時間を使おうとすると無理がある。いくら時間を使うために流行の体験型メニューを増やしてスケジュールを埋めてみても、見学したり、ご馳走を食べる回数を増やしてみても、煩わしいだけだ。おそらく、1週間以上の滞在型の旅には、これまで我々が蓄積してこなかった滞在の楽しみ方がないとうまく時間をつぶせないのだ。

移住に近いような数ヶ月にわたる本格的な長期滞在では、場所を変えた普段通りの生活があると思えばいい。

その中間、すなわち1週間程度の中期滞在型は、短期旅行とも、数ヶ月以上の長期滞在とも違う「滞在生活スタイル」があるのではないかと思う。魅力を感じるような「中期滞在スタイル」が確立できれば、きっと需要はついてくるだろう。それは、これまでのものの延長や改善ではなく、ある種の旅のスタイルに関するイノベーションが必要なのだ。

例えば、田舎で過ごす一日を考えてみても、1、2泊の短期滞在と1週間ほどの中期滞在、数ヶ月の長期滞在は、質的に大きく異なるものがある。

短期滞在では、限られた時間のなかで、せっかく田舎に来たので、という意識が強いせいか、「そば打ち」「稲刈り」「リンゴ狩り」…などスケジュールは様々なプログラムでい

っぱいである。それはそれで楽しみに溢れた一日として思い出に残るだろう。

しかし、短期滞在と同じレベルで中期滞在以上の日程を埋めようとするとなかなか難しい。第一せわしないし、前に一度体験した活動はもう飽きたということも珍しくない。それに、毎日やる活動では、特別な費用がかかったり、他人様の世話になる必要があるものは、難しいと言える。

結論から言えば、短期滞在と長期滞在では、滞在中の行動スタイルに質的な違いがあるということである。おそらく、短期滞在は非日常を楽しむ観光の延長なのであり、中期以上の滞在は場所を変えた日常の延長に近くなる。日常の部分は、自分で楽しみ方、過ごし方を見つけていかななくてはならない。しかし、日本にはまだ後者の場所を変えた日常をうまく過ごす技術が充分でないように感じる。

田舎で意味のある時間を過ごせるかは、結局旅をする人の教養の問題である。いかに精神生活の豊かさを保てるかということなのだろう。昔の日本人のライフスタイルとして、湯治や晴耕雨読の隠居生活を見ると、無為な時間をいかに有意義に過ごすかという術をかなり上手に開発してきたように思える。1週間から10日を同じ場所で過ごすことが楽しいと感じる人々が増えてくれば、日本の観光地は大きく変わるだろう。この部分について知恵を出し合い、経験を蓄積していくことがこれからのわが国の長期滞在を考えるときに必要なだろう。